

今回から「奇跡物語」の中で、〈治癒奇跡物語〉と呼ばれる話についてみていきましょう。福音書に出てくる「病」には次のようなものがあります。

2011年の神学講習会でお話を聞く機会を得た佐藤 研先生(さとう みがく、立教大学文学部キリスト教学科教授)によれば、『神経・精神病(悪霊にとり憑かれた人)、「レプロス」(現在の聖書では「重い皮膚病」と訳されます。今回の話の主題になります。)、中風患者、目の見えない人、耳の聞こえない人および口の利けない人、手や足の萎えた者、水腫人、熱病、異常生理、異常骨格、その他』。福音書には少なくともこうしたものが取りあげられています。

守 〈奇跡〉物語(2) 『重い皮膚病を患っている人をいやす』 (その1)

『マルコによる福音書』1章40~45節を読んでみましょう。

40 さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。41 イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい、清くなれ」と言われると、42 たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった。43 イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して、44 言われた。「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために^{きき}献げて、人々に証明しなさい。45 しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた。それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のいない所におられた。それでも、人々は四方からイエスのところに集まって来た。

上の文章は『新共同訳 聖書』からの引用です。ここで突然ですが、『旧新約聖書 文語訳』で同じ箇所を読んでみてください。

40 一人の癩病人みもとに來り、跪づき請いて言ふ『御意ならば、我を潔くなし給ふを得ん』
41 イエス憫みて、手をのべ彼につけて『わが意なり、潔くなれ』と言ひ給へば、42 直ちに癩病さりて、その人きよまれり。43 やがて彼を去らしめんとて、厳しく戒めて言ひ給ふ。44 『つつしみて誰にも語るな、唯ゆきて己を祭司に見せ、モーセが命じたる物を汝の潔のために^{きき}献げて、人々に^{あかし}證せよ』 45 されど彼いでて此の事を大に述べつたへ、遍く弘め始めたれば、この後イエスあらはに町に入りがたく、外の寂しき處に^{とどま}りたまふ。人々四方より御許に來れり。

「文語訳」— いいですねエ！ 日本語独特のリズムというのでしょうか、切れ味というのでしょうか。就職して3年目から購入し始めた『内村鑑三全集』(岩波書店、全38巻+英文論説翻訳編上・下、拾い読みしかしていません…)で、その小気味よさに魅了されました。中でも、その「反戦論」を『歴史』の授業で、現代語に直しながら中学2年生に教えました。おっと、べつに口語訳の素晴らしさを述べるために引用したのではありません。肝心なことを書きます。

二つの内容は同じです。でも、お気づきのように「冒頭」の部分がちがいます。新共同訳(日本を

代表する聖書学者と、カトリック教会とプロテスタント諸派の神学者によって翻訳された聖書、1987年初版)では、「重い皮膚病」、文語訳では「癩病」となっています。

『^{らい}癩病』とは

『新共同訳』には「重い皮膚病」という不思議な医学用語がしょっちゅう出てくる。(中略) 医者の中でも何のことだか皆目わからない』。山浦^{はるつぐ}玄嗣先生は岩手県大船渡市で「山浦医院」を開業するお医者さん。そして、『わたしの出身は東北大学抗酸菌病研究所』。抗酸菌とは、酸に抵抗する菌、すなわち『結核菌と癩菌のことである』。先生は〈結核・癩病研究所〉で研鑽を積んでいたのです。かつて岩手県でも『癩は遺伝病だと思われてい』て、病人は『家を追われ』『路傍に斃^{へいし}死するのが常であった』といます。そして『癩病人は汚れた者であるとされ、死んでもお寺のお墓には葬られず、路傍に葬られた』そうです。

この病に関する歴史をふり返ってみると、明治40年に「らい予防法」が制定され、全国に13の療養所が建てられました。病人は強制的に隔離され、一生そこから出ることはできませんでした。

『社会のこの病気への恐怖とそれによる冷酷な差別が病人を二重三重に苦しめ』、『戸籍まで抹殺された悲しさと、療養所内での劣悪な生活環境の悲惨さは筆舌に尽くせぬものがあつた』といます。

1995年、この「らい予防法」は廃絶されました。しかし、癩病は完全に治せるようになっても、『日本政府は元患者の社会復帰を許さず、これを放置』しました。2001年にその責任を問う裁判で、政府は敗訴し、謝罪したのをご記憶の方もいらっしゃると思います。

山浦先生は原典のギリシャ語訳を調べ、そこには、はっきりと「レプラ」と書いてあるのを知ります。この「レプラ」という語が西ヨーロッパの国々において使われ、次第に世界的に用いられるようになりました。日本語では「癩」と訳されました。でも、『「癩」という名前があまりにも悲しい差別の歴史を背負っているため』、現在では、癩菌の発見者であるハンセン博士の名をとって「ハンセン病」と呼ぶようになりました。

「レプラ」とは

ここで、佐藤 研先生の「レプラ」に関する考察を読んでください。先生はこの講習会で、『新約聖書における「危機」 — イエスとパウロの場合』というテーマで話されました。イエスとパウロにとってどのような危機が存在し、それをどう受容していったのかを、わかりやすく説明してくださいました。わたしの二男が立教(コミュニティ福祉学部)だったので、「この先生の話をお聴いたことがあるよ」と言っていました(うらやましい!)。先生の「レプラ」の話の要点は以下のようになります。

(『 』内は著書からの引用、傍線は筆者。)

✦旧約聖書の『レビ記』13~14章に、ヘブライ語で「ツァーラアト」という病の規定がありますが、『ほぼ百パーセント、いわゆるハンセン病ではありません』。旧約聖書の時代には、『ハンセン病はパレスチナにはなかったというのが、現在の一般的認識です』。

✦「レプラ」という病気は、『新約聖書の時代では、いわゆるハンセン病とは特定できないというのが新約学の常識』であり、『ハンセン病も含んでいるという見解が説得的』だと思ふ。『紀元前1世紀になって地中海沿岸世界には、(中略)ハンセン病が入ってきたようです』。

✦『この「ファーラアト」という、重い皮膚病(および特定の^{かび}黴の類)が『七十七人訳聖書』(紀元前三世紀ごろ)では、「レプラ」とギリシャ語化され』、それが新約聖書でも引き継がれます。しかし、新約の「レプラ」は壁などに発生する黴の類は除かれ、『純然たる病』で『ハンセン病を含んでいると思われます』。

つまり、「レプラ」を「ハンセン病(癩病)」だけに限定はできない — というのが、現在の聖書学界の一般的な認識になります。ということで『新共同訳聖書』は「重い皮膚病」と訳しているのです。しかし …。

「罪」の結果としての「重病」

イエスの時代、今から約 2000 年以上も前のユダヤにおける「重い皮膚病」患者に対する仕打ちは、山浦先生がお書きになった内容と酷似する、あるいはそれ以上の悲惨さがあったといわれます。レプロス(「レプラ」を病んだ人)以外の重病の人たちも、「罪の結果、そうなったのだ」、「神の呪いによるのだ」と考えるのが当時の一般的・民衆的な理解だったのです。

『ヨハネ』9章1節を引用します。

『1さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。2 弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人たちが生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」3 イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。」

弟子たちも、病気や様々なハンディキャップを負った人たちは、本人か両親のどちらかが「罪」を犯したからだと考えていたことがわかります。イエスは、両方ともキッパリ否定しています。

親の罪が遺伝する — 。ハンセン病だと診断された森田ミツは、自分の家には同じ病気にかかった人はいなかったと、遺伝的伝染を否定しようとしてしました。また、お祭りで会った指を欠いた人に対して、「悪いことをすると、あんな人間になってしまうよ」と母親に言われたことを思い出し、「自分がどんな悪いことをしたというのだろう。」と思い悩んでいたのを覚えていますか(第19回)。

山浦先生は書いています。『彼らは社会的にも法的にも徹底的に排除され、人からも神からも呪われ、町を追放され、谷間の洞窟に身を寄せて、惨めな死を待つしかなかった』と。

ただの『重い皮膚病』なんかじゃない！

差別され、隔離され、排除され、追放され、孤独に死を待たなければならない病気が、『断じて、^{じんましん}蕁麻疹だか、湿疹だか、わけのわからないただの「重い皮膚病」などではないのだ』と、山浦先生は言います。『それは、あらゆる悲惨と苦悩と絶望を背負ったレプラであり、癩で』あるのだと、はっきり書いておられます。

差別用語は使わないことは、現代の社会では当然であり、常識になっています。いろいろな病気やハンディキャップがある方々の身になって思いやることは、とても大切なことです。『だが、』と先生は続けます。『だからといって現実の歴史に目を背け、レプラを単に「重い皮膚病」として片づけることは、人類の背負ってきたこの重い重い歴史をきれいごとの中に忘れ去らせることになる』。現在この病気は完治でき、元患者さんたちも高齢化が進み、やがて「過去の病」となる日も近いでしょう。しかし、現代の若者はこの病気について知っているのでしょうか。さらに、その悲惨

な歴史となれば、ほとんど知らないでしょう。

だからこそ、山浦先生は声を大にして叫びます。

『その人々にただ「重い皮膚病」としか書かない聖書を手渡して、それでイエスの心が伝わるか。イエスの叫びが伝わるか。人類が自分たちの仲間に対して背負っている罪の重さを伝えられるか。その罪に泣かされた数も知れない人々の痛みと涙を伝えられるか。その罪をおのれの十字架によって償おうとしたイエスの心が伝えられるか。』と。

山浦先生の怒りの表情が浮かびます。文章を書いている先生の手には、一段と力がこもっていたでしょう。あるいはパソコンのキーボードを壊すほどの力で叩いていたはずです。そして、目には涙が光っていたかもしれません。読むたびに、先生のこの病に対する思いの強さを感じる箇所です。

『医学生になってから、特に関心をもってハンセン病の療養所に見学に行き、治療の手伝いを』し、『現実にハンセン病というものをこの目で見、この手で触れ』たことのある先生だからこそ、読む者を圧倒する文章になっていると思います。聖書翻訳者の先生方や神学者の方々、および聖職者の皆様は、山浦先生の〈叫び〉をいかに受けとめていらっしゃるのでしょうか ー。

このわたしの問いに対するひとつの〈回答〉があります。わたしがお世話になった神父様は、ハンセン病患者の方から次のような話を聞いたそうです。

「癩菌」は寒さを嫌い、日本列島の北に行くほど身体の内部に侵入し、失明などをもたらす。逆に南の地方では皮膚病変が多い。癩病は他にも、末梢神経・運動神経・自律神経を犯してあらわれる病変が多くある。だから、聖書にある「皮膚病」だけが癩病ではない。この語句では、偏見や差別を受け、隔離・排除された過酷な人生を強いられた患者たちの実態は語れない。その悲惨な歴史や私たちのことを知ってもらうためにも、この箇所を「癩病」と読んでもらってかまわない。

4つの福音書は、紀元後1世紀頃(『マルコ』70年ごろ、『マタイ』・『ルカ』80年代、『ヨハネ』95年以降とされる。日本なら「縄文時代」。)に書かれたものですから、『さて、重いハンセン病を患っている人が、…』と訳されていたら違和感を覚えますよね。聖書翻訳者の方々も苦勞なさっているのです。

『毎日のミサ』という冊子があります。カトリック教会のミサで神父様や信者が使うものです。この本では共同訳聖書にしたがって、「重い皮膚病」という言葉が使われています。この話をしてくださった神父様は、上記の患者さんの気持ちや願いをしっかりと受けとめられ、ミサの中でこの語句を「癩病」と読み替えて朗読されます。わたしは、この神父様の誠実さとその決断をうれしく思っています。

さて今回は、冒頭の『マルコ』1章40～45節を山浦先生がどう訳されているのか。また、いろいろな奇跡物語を私たちがいかに受けとめたらいいのかを考えてみます。

【引用・参考にした書籍】 ・山浦玄嗣『ふるさとのイエス』(キリスト新聞社、2003)

・佐藤 研『イエスの父はいつ死んだか 講演・論文集』より「第8章 イエスの福音といやしのおぼえ」

(聖公会出版、2011) ・日本聖書協会『聖書 新共同訳』 ・同 『新約聖書 文語訳』(2000)